

中日・日中翻訳における文の「出発点」の選択に関する研究

鄧 敏君

(名古屋大学大学院 S)

This paper aims to explore how the "point of departure" in a sentence is chosen in translation between Chinese and Japanese texts and vice versa. The notion of "point of departure" is defined in systemic-functional grammar as the clause-initial ideational element, which is generally thought to be the theme. However, in Chinese and Japanese, the point of departure is not necessarily the theme because of subject ellipsis and topic chaining. Therefore, this paper reports on how the point of departure is changed or preserved in translation, and what influences translators' decision making in choosing the point of departure in the process of translation. The paper also investigates if there are any systemic tendencies in the observed changes and/or preservations of the point of departure in translated texts.

1. はじめに

翻訳の意思決定過程を発見することを目的とする Toury の Descriptive Translation Studies (記述的な翻訳研究、以下 DTS と略称) が近年の翻訳研究において重要な視点となっている。DTS は客観的に検証可能 (testable)、比較可能 (comparable)、追試可能 (replicable) な方法論を用い、翻訳の一般行動上の法則を記述する理論である。本論文は DTS の観点に基づき、中国語と日本語の原文と翻訳文からなる双方向パラレルコーパスを用いて、翻訳文と原文における「出発点」の選択にみられる方略および傾向について考察することを目的とする。本論文では「出発点」とは文の主節の最初位置に置かれる観念構成的要素を指す (認定方法に関する説明は 2.1 と 3.2 で行う)。日本語と中国語において「出発点」というテキスト形成における特別な位置に現れる要素に注目することによって、翻訳がどのように行われるのかを見極めることができると考えるからである。

TENG Minchun, "A Comparative Study of the Selection of the 'Point of Departure' in Translation between Chinese and Japanese." *Interpretation Studies*, No. 6, December 2006, Pages 29-48.

(c) 2006 by the Japan Association for Interpretation Studies

翻訳の意思決定過程を明らかにするには、計量的な調査および内省による質的な考察をともに利用することが有効だと思われる。本論文では、「出発点」の選択は起点言語の影響なのか、目標言語の作用によるものなのか、あるいは他の要因が働いているのかを明らかにし、その中の規則性についても検討していく。

本論文の構成は、以下の通りである。まず、中国語と日本語における「出発点」とそれが翻訳された場合の関係についての論点をまとめ、次に、原文の文法的言語形式が翻訳の「出発点」の選択にどのような影響を与えるかを考察する。最後に、原文の「出発点」が翻訳文でどのような方略によって表現されるのを観察し、そこにはどのような規則性があるのかを検討していく。

2. 「出発点」と翻訳

2.1 中国語と日本語の主題と「出発点」

情報産出の中で一番先に伝える内容要素からなる「出発点」は、情報提示の順番において時間的、位置的に先行する要素である。情報伝達する際に優先的に伝えられるため、書き手が行う一つの意味のある選択であり、文のほかの要素に比べて、より強い何らかの意図が含まれると考えられる¹⁾。ここでの「出発点」は SFG (Systemic Functional Grammar 選択体系機能文法) の theme (テーマ、主題) の定義における point of departure の概念と重なる部分が多いが、theme と同一概念ではない。Halliday による“theme”は、機能的にその節が語ろうとする aboutness であり、つまりそこには主題の概念もあれば、位置的な語順を指す「出発点」の概念も含まれる。しかし、実際には英語以外の言語の場合、以上の定義を適用できないことも少なくはない。特に省略や主題の連鎖のある日本語や中国語の場合には、「出発点」と主題が重ならないことがある。

日本語における主題や theme に関しては、学派によって、または研究者の研究目的、視点によって定義が異なることが多く、諸々の見方がある。しかし、日本語学においては「は」が文の提題機能を果たす助詞であるという見解がほぼ定着している。日本語の「は」が「出発点」以外の要素に添えられると、主題機能が「出発点」以外の他の要素にあることになる。たとえば、(1a)では、下線に引いてある<李君は>は「出発点」であると同時に、主題でもあるが、(1b)の主題は省略された<李君>で、「出発点」の<2003年に>は主題の機能を持たない。(2a)では「出発点」と主題はともに<2003年には>であり、この年にどのような出来事があるのかという問いに対する答えとなっている。

(1) 「李君はいつ日本に来ましたか? (小李什麼時候來了日本)」という問いに)

[日] a. 李君は 2003年に日本に来ました。

[日] b. 2003年に来ました。

[中] c. 小李 2003 年來了日本。(日本語直訳=(1a))

[中] d. 2003 年 來了日本。(日本語直訳=(1b))

(2) (「2003 年には何がありましたか? (2003 年發生了什麼事)」という問いに)

[日] a. 2003 年には李君が日本に來ました。

[中] b. 2003 年小李來了日本。(日本語直訳=(2a))

日本語では語の順番を意味を大きく変えることなく任意に入れ替えることができるが、このような語順操作には何らかの動機付けが働いていると思われる。たとえば、(1a) と (2a) で、「出発点」が異なるのは前の文脈が関与しているからであり、(1a) と (1b) の違いは (1b) では主題の省略によって新しい情報が「出発点」に置かれることとなったからである。

中国語は主題標識がなく、一般に節の最初に置かれる要素はその節が何について述べられるかを宣言する機能を担っているとされてきた(胡 1989、Tsao 1990、Fang and McDonald and Cheng 1995、Halliday and McDonald 2004)。上の (1c) の場合は<李君>が主題であるが、(2b) は<2003 年>という時間が主題である。(1d) は<李君>が省略されているため、「出発点」は主題を表していないが、(2b) と (1d) は「出発点」が主題であるかどうかに関して、形式上の区別はない。

これまでの説明から、両言語とも省略によって、「出発点」に主題機能が伴わない場合のあることが分かる。さらに、中国語には日本語のような提題助詞が存在しないことも、両言語の「出発点」が主題機能において異なった働きをしており、主題や主題発展の原則に違いがあることを示唆している。以上の点を踏まえて、本論文では中国語と日本語およびその翻訳を比較対照するに当たって、「出発点」に主題機能が伴わない場合のあることも念頭におき、文の構成の順番として、最初に具現化された観念構成要素だけを観察の主要な対象とする。

2.3 「出発点」と翻訳

翻訳において、「出発点」は二面性をもっている。「出発点」は起点言語の文において最初に出会う要素でもあれば、目標言語の読者に伝える情報の最初の要素でもあるため、翻訳者にとっては情報構造上特別な位置付けにあると言える。情報提示の順番に関する翻訳技法に関しては、玉置(2004:157)がまとめているように、翻訳文が原文の意図や首尾一貫性を保つために原文の情報提示順序に従って訳すべきだとする考え方と、目標言語の自然の流れに従うべきだとする考え方があり。永田(n.d.)は、中日翻訳の場合には、関係詞の用法がない、無生物構文が少ない、時間や場所は主語の前後に置かれるなどの条件が揃っている点から、「順送りの訳」は決して実行しがたい作業ではないと述べている。以上の翻訳の実践手法から、翻訳文の「出発点」の選択

に影響を与える要因は、起点言語と目標言語の特徴があげられる。それ以外にも、言語システムの干渉とは別に、Baker (1993:243) が提唱する翻訳という行為に見られる「翻訳の普遍性」(Translation Universals) の仮説²⁾が「出発点」の選択に関わる要因として考えられる。翻訳の普遍性とは、単純化、明示性、標準化といった特徴である。特に起点言語、目標言語のどちらからの影響でもはっきり見えない場合には、翻訳行為に存在するメカニズムが関与している可能性があると考えられる。中国語と日本語の翻訳において、実際の翻訳文における言語使用を観察し、「出発点」がどのような要因の影響を受け、どのような傾向を提示するのかを記述する必要がある。

3. 研究方法

本論文では、DTS の観点に基づき、量的な分析と質的な分析を平行して行う。原文と翻訳の相互間にある量的な偏りのあり方を分析することで、偶発的な独立な事例ではなく、ある程度繰り返されて生起する現象を発見することが可能となり、原文と翻訳との関係をつかむことができる。量的な研究は、どの形式が翻訳において好まれるかということを探り当てることを可能にするが、量的な偏りはそれと異なった用い方があることを否定するものではないため、量的な視点以外にも個々の用例を前後の文脈を含め、丁寧に分析していくという質的な考察も取り入れる。

3.1 コーパスの構成

本論文で扱う双方向パラレルコーパスは4種類のサブコーパス、日本語の原文(以下 OJ と記す。以下同様)、中国語の原文(OT)、日本語の翻訳文(TJ)および中国語の翻訳文(TT)から構成される。日本語と中国語の原文同士の比較、また同じ言語の非翻訳文と翻訳文の比較を行うため、言語表現やスタイルの変異の度合いが小さい同じジャンルのテキストから選ぶことが望まれる。そこで、本論文でのコーパスにはテキスト機能および題材の同質性を考慮して、観光案内の文章³⁾を選定している。また、日本語と中国語の翻訳は、プロの翻訳者⁴⁾による翻訳データを収集したもので、同じ翻訳の目的に基づいた質の高い翻訳文が確保されていると言える。

コーパスのサイズは、研究目的、分析手法や観察の項目により適性サイズはさまざまであり、必ずしも大きいほどよいというわけではない。Biber (1995:131) は、実際のデータ分析に基づいて、特定のレジスターにおける一般的言語特徴の分布を見るには、レジスター毎にそれぞれ 1000 文字からなる 10 テキストをもとにすれば十分としている。400~1,000 ほどの規模の文が使用されている theme を研究対象とした論文(Ghadessy & Gao 2000, Teich 2003)を参考にして、本論文では統計的有意差が得られ、かつ、手作業による分析が可能な量であることを考慮し、表 1 に示す内容を有する双方向パラレルコーパスを構築した。

表 1. パラレルコーパスの構成

	OJ	TT	OT	TJ
テキスト数	45	45	39	39
述べ語数 ⁱ	15,944	12,550	11,915	16,776
対応節数 ⁱⁱ	587		608	

注： i. 中国語ではCKIPを、日本語では茶釜2000を利用し、形態素解析を行った結果である。

ii. 対応節数は翻訳文の文の総数を指している。

3.2 「出発点」の言語形式の認定

各サブコーパスにおいて、翻訳文とそれに対応する原文の最初の語群を特定し、それぞれに言語形式の情報を付与していく。本論文では、Halliday (1994)、Ghadessy & Gao (2000)、Halliday and McDonald (2004)、Teruya (2004) の枠組みに従いつつ、日本語と中国語における実際の言語使用の特徴に合わせて修正し、「出発点」の言語形式を単純語群、名詞化、副詞節の「出発点」に分類する。それぞれについては以下で説明する。また、「出発点」として認定される語群は、観念構成要素的⁵⁾「出発点」のみであり、Halliday (1994:70-81) が言及している対人的要素あるいはテキスト形成的要素、つまり文頭によく現れるモダリティを表す語群や接続詞、感嘆詞、呼格といったテキストの前後関係をつなぐ要素⁶⁾は分析の対象から除外する。

単純語群の「出発点」とは、名詞群（例 (3)、(4)、(5)）、副詞群（例(6)）、動詞群（例(7)）といった単一種類の品詞の語群からなる「出発点」である。名詞群は更に単一名詞（例(3)）、名詞、数量詞、代名詞か形容詞に修飾される名詞群（例(4)）、動詞による連体節に修飾される名詞群（例(5)）に分ける。続いて、動詞群に関しては、日本語の場合、文の「出発点」に現れるのは、<行こう>、<始めさせていただきます>のような命令や意思表示などの発話場面が中心であるため、本論文で扱っている観光案内のコーパスでは中国語にのみ見られるものである。

- (3) 田沢湖は周囲 20 km のほぼ円形のカルデラ湖。<OJTT-690>⁷⁾
- (4) 網走市のモヨロ貝塚は、このオホーツク文化の遺跡として有名です。<OJTT-71>
- (5) 沖縄に配備された日本の守備軍は、首里城と周辺地下に、指揮・命令の中核部となる重要な陣地壕をはりめぐらしました。<OJTT-373>
- (6) 一躍、箱館は国際港となったのです。<OJ-125>
- (7) (莒光郷...、整個島嶼狀似一隻「犬」。) 又分東犬、西犬；<ottj-489>
直訳：(莒光郷は…、島が犬の形に見えます。) 更に東犬と西犬に分けています。

名詞化とは節の全体が名詞の働きをするものを指す。日本語の名詞化は形式名詞の

<こと>、<の>、<か>がつく語群であり（例(8)）、全体的な文が分裂構文と呼ばれることもある。中国語では、動詞グループの名詞化、動詞要素の組み合わせの次に<的>によって構成された語群（例(9)）を名詞化という。

(8) 現在も操業を続けているのは、釧路市にある太平洋炭鉱のみです。<OJTT-173>

(9) 如今仍在開採中的，只剩下釧路市的太平洋煤礦。<OJTT-173>

直訳：現在も採掘し続けているのは、釧路市の太平洋炭鉱しか残っていません。

最後に、<街にアカシアやライラックの花が咲くと、北海道は夏。<OJTT-25>>のような複文の場合は、従属節と主節は各自の「出発点」を持っているとみることもできるが、<街にアカシアやライラックの花が咲くと>が主節を修飾し、従属節そのものが「出発点」であるとみることもできる。本論文では、このような主節の意味を補助する、あるいは主節の前提を示す役割を果たす節を「出発点」とする。通常従属節には接続詞などの機能詞——日本語では、<～ば>、<～ため>、<～と>、中国語では<因為>、<由於>、<若>——が付く。ほかに、従属節とはいえないが、はっきりとした節の形式を持たない、例 (11)、(12) のように前置詞群または名詞群に「前」または「後」が付けられる観念構成要素が、文の最初の位置に現れることもある。従属節を含め、このような節あるいはフレーズを本論文では**副詞節**に分類することにする。

(11) 箱館の開港に伴ってペリーの艦隊が箱館港の調査にやって来ました。<OJ-121>

(12) 琉球処分後、熊本鎮台沖縄分遣隊の駐留地とされた首里城が、第二次世界大戦で再び軍に占領されます。<OJTT-372>

3.3 「出発点」の対応関係の異同の分類基準

次に、原文と翻訳文がペアをなす2つの「出発点」の対応関係が、**語群の範囲**および**意味**によって、「維持」、「若干変形」、「変化」のどれに属するかに関する情報を付与していく。Thunes (1998:25-31) は文の対応を4タイプに分けている。タイプ1は一語一語正確に対応、タイプ2は語順や機能語の違い以外はほぼ逐語対応、タイプ3は意味的に差がないが構造的には異なる対応、タイプ4は構造的、意味的に不一致の対応関係にあるものである。本論文では、この4タイプを原文と翻訳文の「出発点」の対応関係に応用する。語群の範囲および意味の一致が見られる場合を「維持」とし、Thunes (ibid.) のタイプ1、タイプ2、タイプ3に該当する。一方、タイプ4の場合は「変化」とする。しかし、Thunes (ibid.) の4つのタイプは文全体に対しての対応についてまとめたものであり、本論文の「出発点」には当てはまらないケースもある。そのため、「維持」と「変化」の間にはっきり区別することができない例に対して「若干変形」というグループを設ける。判断の手順としては、原文と翻訳文が対応する文

や節の「出発点」を比較し、①原文と翻訳文の「出発点」に当たる語群の範囲が同じかどうか、②話題となっている要素またはその意味が維持されているかどうか、という2点を基準にする。①と②の両方とも満たせば、「維持」と見なし、②だけが満たされる場合は「若干変形」とし、両方とも合致しない場合は「変化」とする。「出発点」以外の要素の対応関係は考慮にいけない。

ここでそれぞれの具体例を見ていく。まず、「維持」とは(13a)、(13b)のように、翻訳文は原文に即して変更なく訳されたものである。つまり、原文の「出発点」に当たる語群の範囲と意味が翻訳文においても同じように表現されるものを指す。

(13) a. 台灣的歷史至少可上溯至七千年前。<ottj-26>

直訳：台湾の歴史は少なくとも七千年前に遡ることができます。

b. 台湾の歴史は少なくとも7,000年前にまで溯ることができます。<ottj-26>

また、(14a)、(14b)のように<温泉>という主語・主題が省略された場合は、翻訳文と原文の「出発点」の異同を判定する基準をより広義的に考える。中国語では動詞群が「出発点」になることはあるが、日本語では「出発点」に動詞群が来ることはほとんどない。「出発点」の語群の範疇と意味が異なるとはいえ、このようなシステム的不一致による「出発点」の必然の語順変化は、Thunes (ibid.) のタイプ3の「意味的な差がないが構造的に異なる」に相当する。よって、<述語+目的語>が<目的語+述語>に翻訳される場合、またはその逆の場合は、「維持」と見なすことにする。

(14) a. 具備治療神經系統、消化系統、循環器官疾病的效果，人類利用溫泉水療來做養生保健的工作，已經有很久的歷史了。<ottj-110>

直訳：神経系、消化器系、循環器系疾病を治療する効果があり、人類は温泉を養生や保健の目的で利用する歴史がすでに長いです。

b. 神經系、消化器系、循環器系疾病の治療に効果的で、人類は既に遙か昔から温泉を養生の目的に利用してきました。

原文と翻訳文の「出発点」が明らかに異なる構成のものは「変化」のタイプに属する。Thunes (ibid.) のタイプ4に当たる。たとえば、(15a)の「出発点」は<馬祖列島中最高壁山>だが、(15b)の翻訳では場所<ここ北竿には>が文頭に表現されている。

(15) a. 馬祖列島中最高壁山位在北竿，於壁山觀景台可一覽北竿全景。<ottj-448>

直訳：馬祖列島で最も高い壁山が北竿にあり、壁山觀景台からは北竿島をすべて見渡すことができます。

- b. ここ北竿には馬祖列島で最も高い壁山があり、壁山観景台からは北竿島をすべて見渡すことができます。 <ottj-447>

「若干変形」では原文の「出発点」に何かを加えられたが、基本的に話題の中心が保たされている。つまり、翻訳文において原文で話題の中心となった要素が維持されているが、「出発点」にあたる語群に何らかの変化が加えられたのである。中国語原文の(16a)では、話題になっている<台湾>が副詞節で取り立てられているのに対して、日本語翻訳文の(16b)では、話題が保留され、単純な名詞群に訳されている。他に、(17b)の「出発点」においては(17a)の「出発点」には置かれていない話題になっている<沖縄>が明示的に示されており、「出発点」にあたる語群の範囲が変わっているが、原文の話題の中心の趣旨は変わっていない。

- (16) a. 走進台灣，您將可以深刻感受到這個美麗之島多面向的文化古蹟之美！
<ottj-38>

直訳：台湾に入り／台湾に来ると、貴方はこの美しき島が持つマルチな文化、古跡の美を深く感じ取ることができるはずです。

- b. 台湾では、こうした多様な面を持つ文化の古蹟を堪能することができます。
<ottj-21>

- (17) a. 音楽・芸能・文学・食文化などの面においても、独自性を発揮しており、この独自性こそが沖縄を訪れる人々をとらえて離さない魅力となっているようです。 <OJTT-654>

- b. 沖縄的音楽、芸能、文学、飲食文化各方面、也充滿了獨一無二的魅力，而正是這份魅力深深吸引了造訪沖繩的人們。 <OJTT-654>

直訳：沖縄の音楽、芸能、文学、食文化の各方面において、ユニークな魅力が満ち溢れており、この魅力こそが沖縄を訪ねる人々を強く引き付けるのです。

また、(18a) と (18b) では、原文での「出発点」は単一名詞の主語であるが、翻訳文では後ろの述語が連体修飾節として加えられ、中心語は変わらないが、「出発点」の語群の範囲が大きくなっている。この現象は日本語と中国語における名詞を修飾する表現の使用習慣が異なることから生じると考えられる。(18a) は「一族の人」の出来事を時間的に分断し表現しているのに対し、(18b) は「一族の人」の背景を説明するように表現している。(19a) と (19b) はちょうどその逆であり、伊是名島の内容を規定する要素<悠久の歴史と伝説の島>からなる長い「出発点」は (19b) では単一名詞に訳される。日本語では「出来事の背景」として名詞に修飾表現が高頻度に使用されるが(庵ら 2001:390-391)、中国語では出来事の主体を立て出来事を分断し説明するこ

とが自然である。このように翻訳文の「出発点」の語群の範囲が変わっても、原文の「出発点」の中心語である名詞が維持されているものも「若干変形」として分類する。

- (18) a. 族人為感念這位酋長，便以他的名字為其命名為「阿里山」。<ottj-360>
直訳：一族の人はこの族長を懐かしむために、彼の名を取って「阿里山」と名付けた。
- b. そして、阿巴里族長を懐かしむ人々がその名をとって「阿里山」と名付けたのです。<ottj-360>
- (19) a. 悠久の歴史と伝説の島、伊是名島は、琉球王朝第二尚氏を開祖した尚円王の生まれ島としても名高く、...<OJTT-411>
- b. 伊是名島具有悠久的歴史和傳説，同時也以琉球王朝第二尚氏始祖尚圓王出生之島聞名，...。<OJTT-411>
直訳：伊是名島は、悠久の歴史と伝説を持っており、そして琉球王朝第二尚氏の尚円王の生まれ島としても有名であり、...

3.4 研究焦点および分析手法

3.2 と 3.3 で述べた「出発点」の認定方法および対応関係の異同の分類に関する情報を集計した結果に基づき、OT→TJ と OJ→TT の「出発点」の選択において、①「維持」、「若干変形」、「変化」の対応関係の方略は言語によって違うのか、その原因は何なのか、②翻訳文の「出発点」の選択は原文の形式とどのような関係があるのか、を考察する。集計結果の有意性および相関関係を示すために、以下の2種類の統計手法を使う。サブコーパス間で特定表現の出現頻度の分布に偏りが有意かどうかを検定するには、 χ^2 二乗検定を用いる (Oakes 1998)。また、2つの要素に相関関係を分析するには「対応分析 (correspondence analysis)」の手法を利用する (安本・本田 1981)。「対応分析」は一般に質的データの解析に使われる手法であり、「対応分析プロット」は「対応分析」に基づき、要素間の関係を直観的に分かりやすく提示した図である。特に、データに関わる要因が多く、数字や表から意味のある情報を引き出すのが難しい場合に有効とされている。また、「変化」の「出発点」の原因のような、量的な分析から得ることのできない情報は、用例を読み解きつつ検討していく。

4. 結果および分析

4.1 原文の「出発点」の形式

翻訳の「出発点」に対応する OJ と OT の「出発点」の形式を集計した結果を図 1 で示す。ここでの形式は、名詞化、従属節、副詞節および、単一名詞(NG と記す。以下同様)、単純修飾名詞群(2NG)、連体修飾名詞群(3NG)、副詞群(AG)、動詞群(VG)などか

らなる。OTとOJの「出発点」の形式を比べると、OTは45.8%の「出発点」がNGであり、OJより副詞節、VGの使用が多いことが分かる。一方OJは名詞化と2NG、3NGの使用が顕著に多くみられる。AGの使用に関しては大きな違いはみられない。

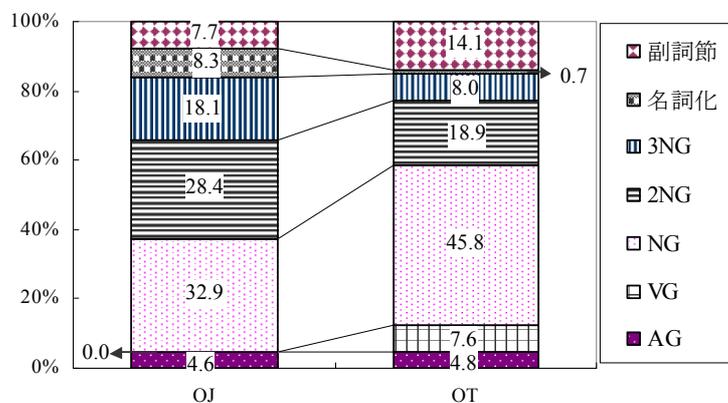


図1 OJとOTの「出発点」の形式

4.2 翻訳文と原文の「出発点」の対応関係の割合

OT→TJとOJ→TTの「出発点」の対応関係の頻度と比率を図2で示す。「維持」において、OT→TJはOJ→TTよりやや高く、「若干変形」は両者に大きな違いはみられないが、「変化」においてはOT→TJはOJ→TTより低いことが分かる。OT→TJとOJ→TTの「出発点」の「維持」、「若干変形」、または「変化」の頻度に差はないかを χ^2 二乗検定で検定したところ、有意である ($\chi^2(3)=18.366, p<0.01$) との結果を得た。つまり、日本語に翻訳される時は「出発点」が維持される傾向が強く、中国語に翻訳される時は「変化」の割合が高いといえる。

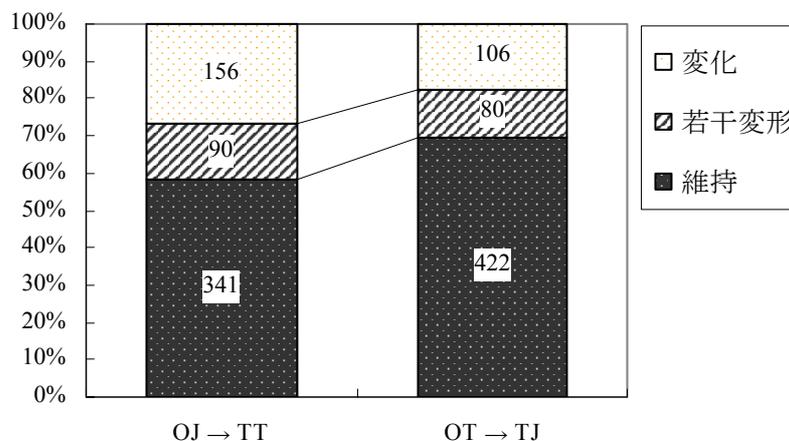
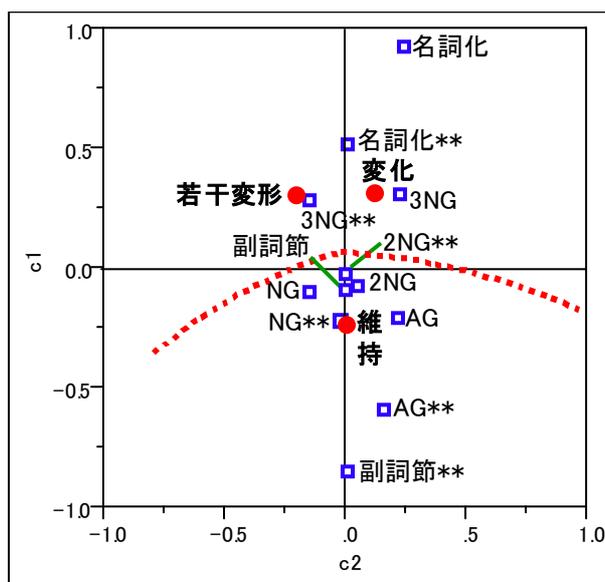


図2 OT→TJとOJ→TT「出発点」の「維持」、「若干変形」、「変化」の比例

4.3 原文の形式と翻訳の方略の相関関係

続いて、原文の形式は翻訳文の「出発点」にどのような関係があるのかを対応分析の手法で検討してみる。まず、OJ→TT の関係に注目しよう。原文 OT の「出発点」の形式と、翻訳 TJ における「出発点」の「維持」、「若干変形」、「変化」の相関関係を図 3 の対応分析プロットで示す。ここで、図 3 にみられる<●>は「出発点」の「維持」、「若干変形」、「変化」を表し、四角のマーク<■>は言語形式の下位グループと助詞(が、は、も、こそ、だけ、以下「助詞」と記す)が付いているのと付いていないものを示している。「助詞」が付く「出発点」は主題または主語を現す語群であり、「助詞」が付いてないのはそうでない語群という違いがあるため、分けて観察した方がよいと思われる。<■>と<●>の距離が近いほど、その相対的使用頻度が大きいことを意味している。たとえば、3NG という形式は、「維持」、「変化」、「若干変形」の中で、「変化」に一番近いため、3NG の「出発点」が翻訳文の中で変化されることが多いことを示している。



● OJ→TT 対応関係 ■ 形式

図 3 OJ の「出発点」の言語形式と TT の対応関係の対応分析プロット

注：形式の後ろに「**」が付いている場合は、語群に助詞の「は」、「が」、「も」、「こそ」、「だけ」が付いていることを意味し、付いていないのは以上の助詞が付いていないことを示している。

図 3 を見ると、点線の下側の領域にある言語形式 (NG、2NG、AG、副詞節の「助詞」の付いていると付いていない場合両方) は TT で維持される傾向が強いことを表している。また、OJ の「出発点」が「3NG+助詞」の場合は「若干変形」に近い。3NG、名詞化、「名詞化+助詞」は「変化」の傾向が強く見られる。

AG、副詞節の下には多種多様な形式があるため、詳しい分析は別稿で行うことに

し、以下は名詞群を中心に見ていきたい。図 3 では、全体的に同じ形式の名詞群に「助詞」が伴うと「維持」される傾向が「助詞」を伴わない場合よりも強いことが分かる。また、形式が一番単純な「NG+助詞」が「維持」に最も近く、「2NG+助詞」はやや「維持」から離れてはいるが、「若干変形」と「変化」との距離を比べると「維持」に一番近い。「3NG+助詞」が一番「維持」から離れており、原文では連体節に修飾される「出発点」が翻訳文では「若干変化」のケースが多い。そして、3NG に「助詞」が付いていない時には「変化」に近く、その具体例を見ると、(20a) のように主語が前方照応のために省略されている例が多く見つかった。つまり、3NG は原文に主語が省略されていることと関連し、翻訳では何らかの変化が加えられるのである。

- (20) a. (……北海道は夏。) 梅雨がなく、台風の影響もほとんどない爽やかな季節です。<OJTT-26>
 b. 北海道の夏天是個沒有梅雨，也罕受颱風影響的舒爽季節。<OJTT-26>
 直訳：北海道の夏は梅雨がなく、台風の影響も滅多にない爽やかな季節です。

また、OJ の「名詞化+助詞」の「出発点」は「変化」と緊密な関係を持つ形式である。図 1 から分かるように、中国語では名詞化の使用頻度が低いため、TT では「変化」または「若干変化」の手法で翻訳されることが多い。具体例として、(21a) では日本語の名詞化の「出発点」が中国語に翻訳されるに際し、(21b) のようにより簡単な語群の「出発点」が作られたのだと考えられる。つまり、これは両言語の使用習慣上の違いと思われる。

- (21) a. 箱館に西洋の文化がいち早く入るのは必然の結果です。<OJTT-126>
 b. 而西洋文化也順理成章大舉進入箱館。<OJTT-126>
 直訳：そして西洋の文化も当たり前のように大挙して箱館に進入しました。

次に、OT→TJ の対応分析プロットの図 4 をみると、OT の「出発点」の形式によって、TJ の選択傾向がうかがえるが、OJ→TT の場合とは異なっているところが多い。点線に囲まれている左下の中にある言語形式 (NG、3NG、2NG、AG) は維持される傾向が強いことを表している。OT の「出発点」が VG の場合は TJ では「変化」の手法がよくとられ、名詞化と副詞節の「出発点」が「若干変形」により近寄っていることが読み取れる。

OJ→TT と同じく、形式が簡単な NG は維持される傾向が高い。また、中国語の原文の形式が VG であることは主語または主題の省略を意味している。そのため、OT→TJ も OJ→TT も「変化」へ偏っている形式は主語や主題の省略と関係しているといえる。**3.3 節**の最後に述べた名詞修飾語の性質からいうと、OT の 3NG の「出発点」が TJ で

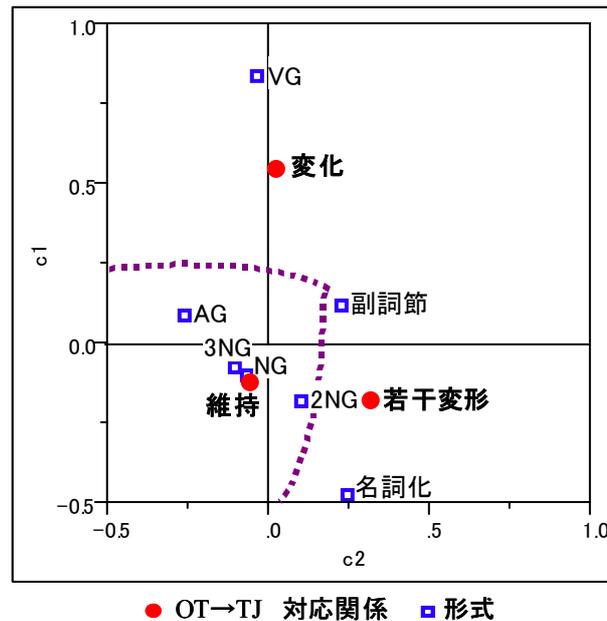


図4 OTの「出発点」の言語形式とTJの対応関係の対応分析プロット

多く維持されることも理解できるのであろう。ほかに、OTにおける名詞化について、実際の使用頻度はわずか4例しかいないため、分析は保留する。

ここまで原文の形式が翻訳の対処の方略とどう関わるのかを見てきた。以上の量的分析結果から原文の形式は翻訳の「出発点」の構成の方略に直接に影響する唯一の要因と結論するつもりはないが、確率からいうと翻訳は特定の原文の言語形式に特定の処置パターンを割り当てることができる。OT→TJとOJ→TTどちらの場合においても、目標言語にあまり用いられない形式、または省略を暗示する形式の「出発点」には何らかの変化が加えられる傾向が見られる。また、単一名詞のようなシンプルな形式の「出発点」の場合には原文に対応しやすい傾向がみられる。単一名詞が維持されやすいことを、文の主題の観点から考えると、名詞群はその文の主題を担うことが多いため、翻訳文で維持される確率も高いと考えられる。しかし、これはあくまでも一つの可能性であり、主題と「出発点」の「維持」の関連性は更なる厳密な検証が必要と思われる。

また、日本語の翻訳文は中国語の翻訳文より原文の「出発点」をなぜより強く維持するのかに関しては、翻訳にみられる共通の傾向と、言語の習慣の違いという2つの要因が働いていると考えられる。翻訳にみられる共通の傾向とは、翻訳文では原文の単一名詞を維持する傾向であり、言語の習慣的な違いとは、中国語で単一名詞の「出発点」が多く使用されることである。すなわち、もともと中国語の原文にあるNGの「出発点」が半分近くも占めているため、日本語に翻訳されるときにも多くが維持されるわけである。それに対して、日本語の原文に三分の一のNGは多く維持されたが、

複雑な名詞化や連体節に修飾される名詞の「出発点」も比較的が多いため、中国語に訳すと「変化」の方略がとられ、全体的な「維持」の割合も低くなったのである。

5. 「変化」の「出発点」

4.3 で見てきたように、原文の言語形式は翻訳文の「出発点」を維持するのに大きな関連性を示している。原文の「出発点」の形式が目標言語に少ない、または主語・主題の省略を意味するとき、翻訳文の「変化」と直接的に関係するのである。本節では変化された翻訳の「出発点」の全体的な傾向をまとめ、その背後にある原文の言語形式以外の要因を検討していく。「変化」のいくつかのパターンに関する具体的な説明は後で行うが、まず基本的な特徴を見てみる。表 2 は、OJ→TT では「添加」が一番大きく占めており、次に「語順変化」、そして「語群の縮小」、「語群の拡大」も大きく占めている。OT→TJ では、OJ→TT と同様、「添加」が一番多く、次に「語群の拡大」、「語順変化」、「ヴォイス変化」などが上位であることを示している。ここで両方とも共通するパターンである「添加」「語順変化」「語群拡大」について詳しく考察する。

「添加」とは原文にないものが翻訳文に添加される場合を指す。(22a) は朝霧高原について紹介する文章の最初の 2 文である。(22b) の 2 つの文とも (22a) にない「主語」が添加されている。

- (22) a. 富士山の西南麓、国道 139 号沿いにあります。<OJTT-625> 富士の溶岩帯からなり、樹木は少なくカヤの草原が広がっています。<OJTT-626>
 b. 朝霧高原位於富士山の西南麓，在國道 139 號路旁。<OJTT-625> 高原由富士的溶岩帶形成，樹木稀少、茅草原野遼闊。<OJTT-626>
 直訳：朝霧高原は富士山の西南麓、国道 139 号沿いに位置しています。高原は富士の溶岩帯からなり、樹木が少なく、カヤの草原が広がっています。

表 2. 「変化」のパターン

OJ → TT			OT → TJ		
順位・パターン	N	%	順位・パターン	N	%
1. 添加	45	28.8	1. 添加	22	20.8
2. 語順変化	35	22.4	2. 語群の拡大	21	19.8
3. 語群の縮小	34	21.8	3. 語順変化	17	16.3
4. 語群の拡大	22	14.1	4. ヴォイスの変化	16	15.1
その他	23		その他	33	
「変化」の総数 ⁱ	156	100	「変化」の総数 ⁱ	106	100

注： i. 一つの原文→翻訳ペアに複数の変化の方略が使われることがあるため、総数は各項目の合計ではない。

「語順変化」とは (23a)、(23b) のように、原文にある要素がすべて翻訳されてはいるが、要素の位置が変えられていることを意味し、原文と翻訳の間では「出発点」の成分が異なる。(23a)において原因を表す<因鐵道的開闢>は、(23b)で文の最初の位置に運ばれている。(24a)の文は日本語でも有標な語順であるが、(24b)では文の主語が最初の位置に運んでいる。語順が移動される理由はおそらく言語的な使用慣習が主な原因だと考えられる。原文の語順がそのまま翻訳されると、やや不自然なため、より目標言語で自然な順番、無標の語順に並べられる。

- (23) a. 鄒族人也因鐵道的開闢，進入另一個被長期剝奪自然資源，改變傳統生活文化的階段。<ottj-272>

直訳：ツオウ族の人々は鐵道の開設のために長期にわたり自然の資源が奪い取られ、伝統的な生活や文化が変化させられていく段階に入ることとなりました。

- b. 一方、鐵道の開設により、ツオウ族は再び長期にわたり自然の資源を奪い取られ、伝統的な生活や文化を変化させていくこととなりました。<ottj-272>

- (24) a. 隣接する 2 つの島で新城島と呼ぶため、八重山の人々は、通称「パナリ（離れ島）」と呼んでいます。<OJTT-446>

- b. 八重山の人們將這 2 座島所組成的新城島稱為「Panari（離島）」。

直訳：八重山の人々は、この 2 つの島からなる新城島を「パナリ（離れ島）」と呼んでいます。

一般に日本語の語順は中国語より自由であると言われている。語順の融通のきく日本語に翻訳すると中国語の「出発点」を維持することは容易であり、中国語のような語順で文法関係を表す言語では固有の語順を守らなければならないため、中国語に翻訳する際には変化の度合いも大きくなると考えられる。「出発点」の観察だけで全体の状況を言うことはできないが、確かに TT では TJ より原文の語順を変えることがすし多くみられる。

「語群の拡大」は、中国語の「出発点」は日本語では名詞化として翻訳される (25a)、(25b) のような場合もあれば、原文の要素をより範囲の大きい語群で表現した (26a)、(26b) のような例もある。前者はおそらく言語のシステムの要因によるが、後者の語群拡大の問題は翻訳における共通の現象である。もちろん、「語群の拡大」の頻度は原文の単一名詞が維持される割合、または「語群の縮小」による「変化」と比べにならないほど低いが、意味関連のある語群をつなげ、より大きな語群にする現象が両方向の翻訳ともみられる翻訳の方略である。

- (25) a. 日月潭名稱首見於道光元年（1821）北路理番同知鄧傳安之〈遊水裡社記〉文中，…<ottj-161>

直訳：日月潭という名称は、道光元年（1821年）北路理番同知である鄧傳安による「遊水裡社記」の文章に初めてみられる。

b. 日月潭という名称が初めて文献に登場するのは清の道光元年（1821年）、北路理番同知の役職にあった鄧傳安による「遊水裡社記」という一文にみられる。

<ottj-161>

(26) a. 七千年前起到大約四百年前、南島語系原住民の祖先先後、陸續的漂流到台灣來、成為目前所知台灣最早的居民。 <ottj-43>

直訳：七千年から約400年前の間に、オーストロネシア語族の先祖が続々と台湾に漂流してきて、現在分かる台湾で最も早い住民となったのです。

b. 7,000年前から約400年前の間に台湾に漂流してきたオーストロネシア語族が、現在分かっている台湾で最も古い先住民です。 <ottj-43>

以上、変化の理由を述べてきた。最も注目に値するのは、OT→TJとOJ→TTともに「添加」が最上位を示していることである。原文にない語彙要素を添加の手法で補うのは翻訳の普遍性である「明示化 (explicitation)」の現れだと思われる。明示化⁸⁾とは、翻訳テキストには原文よりも、あるいはどちらの言語のテキストよりも、代名詞を名詞に、省略されたものも復元するなど明示度合いが高くなる傾向のことである。添加される「出発点」の要素の内訳（図5）を見ると、両言語とも一番多く添加される要素は主語である。他に、場所、時間などの添加もみられるが、実際の文脈を参照すると、これら添加された語群はすべて前文脈にすでに現れた情報である。翻訳文では原文に明示されていない主語や主題を補い、そうすることによって、前文脈とのつながりが強まり、文章としての結束性もより強くなる。しかし、その反面、中国語と日本語においては談話の主題は省略によって示される場合があること（砂川 2005:83）から考えると、「添加」はかえって文をしつこく感じさせることもあるかもしれない。

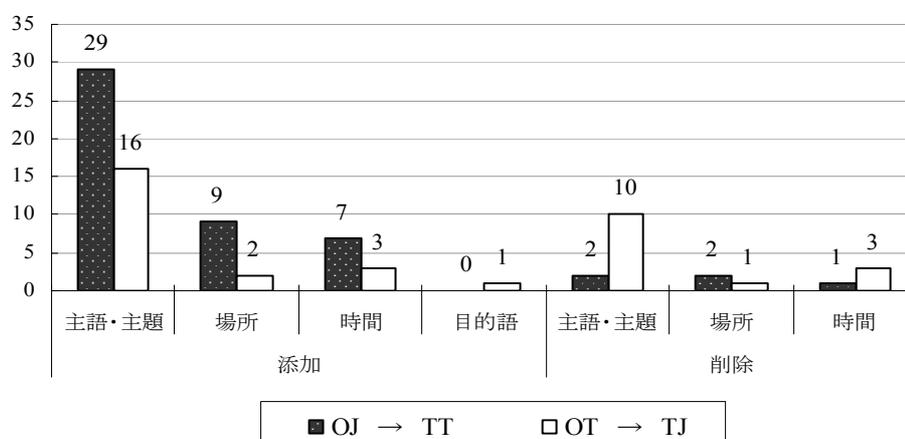


図5. 翻訳の「出発点」に「添加」および「削除」された要素

OJ→TTの方がOT→TJより8%（23例）以上も高い比率で「添加」がみられることは、中国語に翻訳すると、「出発点」が添加されることが多いことを意味する。「添加」と反対の手法である、原文のある要素が翻訳では表現されないという「削除」⁹⁾についてもみしてみる（図5）と、OT→TJとOJ→TTはそれぞれ合計14、5と頻度が低く、「添加」の手法とは逆に、OT→TJの方でより多く使用されていることが分かる。中国語と日本語はともに主語・主題の省略が存在する言語ではあるが、省略の度合いは異なるであろう。翻訳文の「出発点」の選択に関して、中国語の翻訳文は日本語の翻訳文より原文にない要素の「添加」が多く、原文にある要素の「削除」が少ないことから、中国語の「出発点」における翻訳の選択では明示化の手法が好まれるといえる。

7. むすび

本論文はDTSの観点から、「出発点」の選択にみられる方略および傾向について考察してきた。全体としては翻訳文では原文の「出発点」が維持される傾向が非常に強いことが分かった。Altenberg (1998) が英語とスウェーデン語、Hasselgård (1997, 1998, 2004) がノルウェー語と英語、Ghadessy & Gao (2000) が英語と中国語の翻訳について行った調査でも、原文を維持する割合は異なるものの、「変化」より維持する方が多い傾向を見せるという点においては、本論文と同じような結果を示している。これらの結果は、翻訳文が原文の順送りに従う傾向は、原文の順送りに翻訳することを物語っている。

翻訳の「出発点」の選択に影響する要素をまとめると、日本語と中国語とも見られた単一名詞が翻訳に維持されることは起点言語の影響と考えてもよいし、翻訳に見られる一種の規則性ともいえる。一方、語順の調整や、日本語へ翻訳するとき連体節に修飾される名詞群および中国語へ翻訳するときの語群の縮小は目標言語による影響といえる。さらに本論文では、主語・主題の添加という翻訳の普遍性といわれる明示化の現象も観察されたが、ここに言語のシステムの要素の影響が完全に排除されることは困難と思われる。

本論文では観光案内というレジスターの原文とその翻訳文の「出発点」の相関関係を検討した。その際、新たな方法論で、「出発点」という具体的なテキスト形成の項目を用い、実際に中日・日中翻訳の言語使用を記述し、翻訳行為に見られるいくつかの傾向を明らかにした。本稿で得た結果を一般化するためには他のレジスターの言語資料による更なる検証が必要と思われる。また、これからは「出発点」の意味役割、日本語の「は」、文脈の主題、翻訳者の個人的スタイルなどが翻訳にどのように影響を与えるのかを課題にし、研究の範囲を広げていく必要がある。

著者紹介： 鄧 敏君（トウ・ピンクン TENG Minchun）台湾生まれ。現在名古屋大学大学院 国際開発研究科 国際コミュニケーション専攻後期課程に在学中。コーパスを用いた翻訳テキストの特徴に関する研究に関心を持っている。Email : claireteng@hotmail.co.jp

【註】

- 1) ここでは以下の説明を加えておきたい。「出発点」の情報的な機能はあくまでも「優先」という概念であり、一方、「出発点」以降にくる要素（SFG の言い方では Rheme である）は話者がメッセージの中心に置きたいことそのものであり、メッセージの核心、いわゆる情報の重みを本来的に有している。それに対し、「出発点」はそれ以降の要素より情報性が低い。
- 2) 翻訳という行為には起点言語と目標言語の要因を超えるメカニズムが存在し、その作用により翻訳テキストには起点言語にも目標言語にもみられない特徴（簡単化、明示性、標準化、異常分布など）が生じるとされている。実際に、いくつかの研究によって、翻訳における高頻度の語彙の使用頻度の異常分布、明示化や標準化などが証明されている。もちろん反論や新しい特徴の発見も報告されている。また、普遍的な特徴は全て立証されている仮説ではないことも指摘されている。
- 3) 言語資料の選択についてより詳しく説明しておく。原文テキストは日本と台湾の政府のインターネットのサイトから、共通の目的——景勝情報の紹介、旅行の招致——を持ち、伝える内容と話題も近似した題材のものを選んだ。具体的には、日本と台湾に共通する海洋、島、山に関する地理的環境の説明、歴史に関して、台湾の開発年代と比較的近い北海道および沖縄の開発や変遷の流れを中心とするテーマのテキストを選ぶ。地理に関するテキストとしては、台湾と地理的な共通性を持つ沖縄（島、海）および静岡（山、温泉）のテキストを選択している。
- 4) OJ→TT は中国語を母語とする翻訳者 3 名、それぞれの翻訳歴は 2 年、3 年と 8 年である。OT→TJ は日本語を母語とするプロの翻訳者 3 名、それぞれ 6 年、10 年、12 年の翻訳歴を持つベテラン翻訳者である。
- 5) Halliday (1994) の選択的機能文法 (SFG) によると、観念構成的要素とは、節中の陳述対象または実際の行動に参加する成分や、背景説明の状況要素など内容の事柄に関係する語群である。
- 6) これは Halliday (1994 : 70-81) のいう interpersonal theme と textual theme といった multiple theme である。
- 7) 例文の最後に <> によって括られる情報は例文の出典を指している。<> 中の ottj は中国語の原文と日本語の翻訳文、OJTT は日本語原文とその中国語訳からなるパラレルコーパスを表し、後ろの数字はコーパス内の行番号を表している。翻訳の方向をより

分りやすく区別するために、中国語の原文と日本語訳は小文字の ottj、日本語原文とその中国語訳は大文字の OJTT で示す。何も示していない場合は著者による翻訳や作例である。また、例文の下線は筆者によるものであり、「出発点」を表している。

- 8) 明示化とは、Blum-Kulka (1986) により指摘された翻訳という 2 言語が接触するとき
に起こりやすい現象であり、その後 Baker (1993) はこれを翻訳の普遍的な特徴として扱っている。
- 9) 本論文では、「削除」は原文にある要素が翻訳文で表現されないという翻訳の手法を指す場合に用いる。一般言語使用に見られる主語・主題の省略の現象と区別するためである。

【参考文献】

- Altenberg, B. (1998). Connectors and sentence openings in English and Swedish. In Stig Johansson and Signe Oksefjell (eds.) *Corpora and Cross-linguistic Research: Theory, Method, and Case Studies*. Amsterdam-Atlanta: Rodopi. pp. 115-143.
- Baker, M. (1992). *In Other Words -- A Coursebook on Translation*. London and New York: Routledge.
- . (1993). Corpus Linguistics and Translation Studies: Implications and Applications. In M. Baker (ed.) *Text and Technology: In honor of John Sinclair*. Philadelphia and Amsterdam: John Benjamins. pp. 231-250.
- Biber, D. (1995). *Dimensions of Register Variation: a Cross-linguistic Comparison*. Cambridge University Press.
- Blum-Kulka, S. (1986). Shifts of Cohesion and Coherence in Translation. In J. House & S. Blum-Kulka(eds) *Interlingual and Intercultural Communication: Discourse and Cognition in Translation and Second Language Acquisition Studies*. Tübingen: Gunter
- Fang, Y., McDonald, E. and Cheng, M. (1995). On theme in Chinese: From Clause to Discourse. *On Subject and Theme: A discourse functional perspective*. Amsterdam: John Benjamins. pp.235-273.
- Ghadessy, M. & Gao, Y. (2000). Thematic Organization in Parallel Texts: Same and Different Methods of Development. *Text*. Vol. 20, No. 4. pp. 461-181.
- Halliday. M.A.K.(1994). *An introduction to Functional Grammar*. Second Edition. Edward Arnold Limited.(翻訳 山口登・笈寿雄 訳(2001)『機能文法概説——ハリデー理論への誘い』くろしお出版)
- Halliday, M. A. K. and McDonald, E. (2004). Metafunctional Profile of the Grammar of Chinese. In Caffarel, Martin, and Matthiessen. (eds) *Language Typology: A functional perspective*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company. pp. 305-396.

- Hasselgård, H. (1997). Sentence openings in English and Norwegian. *Corpus-based studies in English: papers from the seventeenth international conference on English Language research on computerized corpora*. Amsterdam: Rodopi. pp. 145-167.
- . (1998). Thematic Structure in translation between English and Norwegian. In Stig Johansson and Signe Oksefjell (eds.) *Corpora and Cross-linguistic Research: Theory, Method, and Case Studies*. Amsterdam-Atlanta: Rodopi. pp. 145-167.
- . (2004). Thematic choice in English and Norwegian. *Functions of Language*. 11(2). pp. 187-212.
- Oakes, Michael P. (1998). *Statistics for Corpus Linguistics*. Edinburgh: Edinburgh University Press.
- Teich, E. (2003). *Cross-Linguistic Variation in System and Text -- A Methodology for the Investigation of Translations and Comparable Texts*. Mouton de Gruyter.
- Teruya, K. (2004). Metafunctional Profile of the Grammar of Japanese. In Caffarel, Martin, and Matthiessen.(eds) *Language Typology: A functional perspective*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company. pp. 185-254.
- Thomson, E. A. (2005). Theme unit analysis:A systemic functional treatment of textual meanings in Japanese. *Functions of Language*. 12:2. pp. 157-179.
- Thunes, Martha. (1998). Classifying translational correspondences. In Stig Johansson and Signe Oksefjell (eds.) *Corpora and Cross-linguistic Research: Theory, Method, and Case Studies*. Amsterdam-Atlanta: Rodopi. pp. 25-50.
- Toury, G. 1995. *Descriptive Translation Studies and beyond*. Philadelphia and Amsterdam: John Benjamins publishing company.
- Tsao, F. F. (1990). *Sentence and Clause Structure in Chinese: A Functional Perspective*. Taipei: Student Book Co., Ltd.
- (1978). *A Functional Study of Topic in Chinese: The First Step Toward Discourse Analysis*. Taipei: Student Book Co. (中国語翻訳 曹逢甫著 謝天蔚訳 (1995)《主題在漢語中的功能研究——邁向語段分析的第一步》北京：語文出版社)
- 安本美典・本多正久(1981)『因子分析法』培風館
- 庵功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘 (2001)『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク
- 永田小絵 (n.d.) 「語彙選択と構造転換——中日翻訳の問題点について」
<<http://nikka.3.pro.tok2.com/cjtrns.htm>> (アクセス日付 2006/4/16)
- 玉置祐子 (2004) 「体系的翻訳論への一試論——情報構造および関連性理論」『通訳研究』No. 4. pp. 157-169.
- 砂川有里子 (2005) 『文法と談話の接点』くろしお出版
- 胡壯麟・朱永生・張德泉 (1989) 《系統功能語法概論》湖南教育出版社